

### 1. 企画趣旨

平成22年度に開設した十文字学園女子大学大学院人間生活学研究科では、教員の資質の維持・向上の方策の一つとしてFD活動を行っている。大学院教員(18名)は、「本務である」を削除)人間生活学部のFD活動に加えて大学院のFD活動に携わるため、令和元年度は、新しい知見の共有と研究教育活動への展開を目的とした2回の大学院独自のFD研修会(外部講師1名、学内講師2名)を企画した。また、大学院における授業・研究指導の実態・課題等に関する情報交換・討議を行うため、学生との意見交換会での聴き取り、ならびに、授業アンケートの代替として、「大学院生の声を聴くアンケート」をメールで行っている。以下に、それらの概要を報告する。

なお、アンケート結果については学生数、教員数ともに少数のため、個人情報保護を遵守し、公表しない。

### 2. 実施概要

#### (1) 2019年度 第1回大学院FD研修会の開催

##### 【開催概要】

実施日時・場所：2019年12月7日(土)15:00~16:30 8310教室

参加者：大学院所属教員17名

大学院生(大学院卒業生を含む)14名

栄養・食物関連学科(食物栄養学科ならびに健康栄養学科)教員12名

テーマ：「網羅的代謝物解析(メタボロミクス)を用いた医学・栄養学研究

—代謝物から俯瞰する栄養と健康の関わり—」

講演者：神戸大学医学部卒・医学博士(京都大学)

神戸大学大学院医学研究科・准教授 吉田 優先生

(消化器内科学分野・病因病態解析学分野長 併任)

<http://www.med.kobe-u.ac.jp/metabo/kenkyu.html>

##### 【講演概要】

メタボロームとは、生体試料(体液、組織、細胞等)に含まれる低分子代謝物(分子量1,000以下)群です。これらの代謝物を網羅的に定性・定量解析するメタボローム解析(メタボロミクス)は、ポストゲノム科学の一分野として生まれた、オーム科学の一つです。特に近年では、質量分析計を用いた解析技術が進展し、ライフサイエンス分野では欠かせない研究手法のひとつとなりつつあります。医学研究をはじめとしたさまざまな分野においてもその重要性が認識され始め、特にバイオマーカーの候補の検索に有用とされています。その理由として、様々な病態において、病気に関連する細胞・組織内において酵素タンパク質による代謝の変動が起こり、その疾患特有の代謝物のパターン(メタボロームプロファイル)へと変化し、それが血液・尿中にも反映されることが予想されるからです。これまで私達は、さまざまなメタボロミクスシステムを確立し、消化器がんを中心にバイオマーカー探索を行ってきました。疾患特異的に変動する代謝物を組み合わせることで、疾患予測式を作成し、早期疾患診断システムの開発に取り組んでいます。

本講演では、メタボロミクスの医学研究や薬学研究、そして栄養学研究への応用について、私たちの研究成果をご紹介します。

##### 【実施報告】

医学分野で開発されたメタボロミクスという考え方ならびに手法の理解と、今後の、栄養・食品分野への応用を考える機会となる、最新の興味深い講演内容であった。

参加した教員ならびに大学院生が、それぞれの専門分野に基いて、大変活発に質疑応答を行った。今後の研究教育活動への展開が期待された。



(2) 2019年度 第2回大学院FD研修会の開催

【開催概要】

実施日時：2020年2月13日（木） 研究科委員会終了後 16:30~18:00 8202 教室  
 参加者：大学院所属教員 14名

テーマⅠ：「美味しさ評価技術の開発を目指して」

食物栄養学科教授 大倉 哲也 先生

テーマⅡ：「健康教育から健康推進研究へー混合研究法への回帰ー」

人間社会福祉学科教授 吉田 亨 先生

【講演概要ならびに実施報告】

2019年度より、新しく十文字学園女子大学大学院教員になられた、教授 大倉哲也先生、教授 吉田亨先生を講師とする研修会を開催した。

今までの研究の経緯とこれからの展望について、それぞれ、講演（30分）と質疑応答を行った。参加した教員との間で、今後の本学大学院での教育・研究活動の方向性を共有することができた。

講演内容を、パワーポイント資料として、以下に添付する。

資料：テーマⅠ：「美味しさ評価技術の開発を目指して」 大倉 哲也 先生（抜粋）

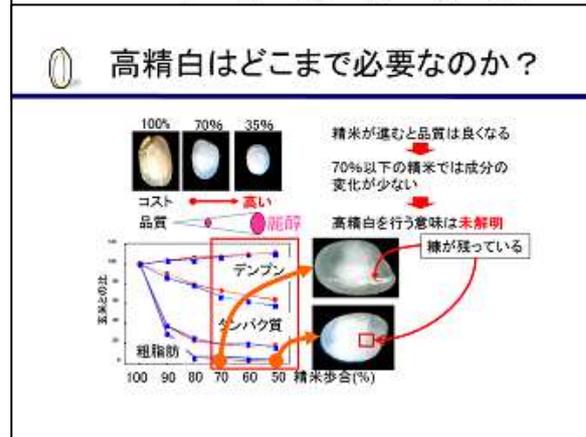
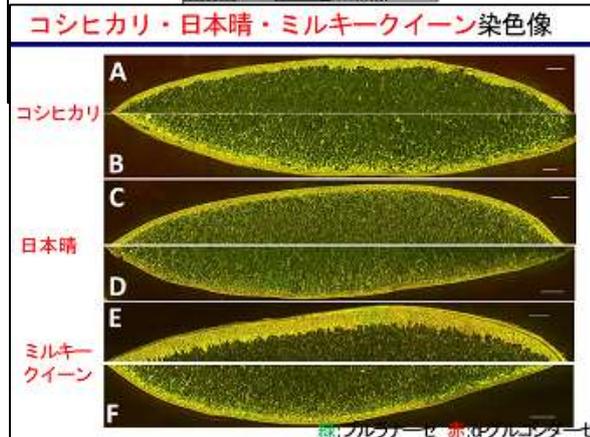
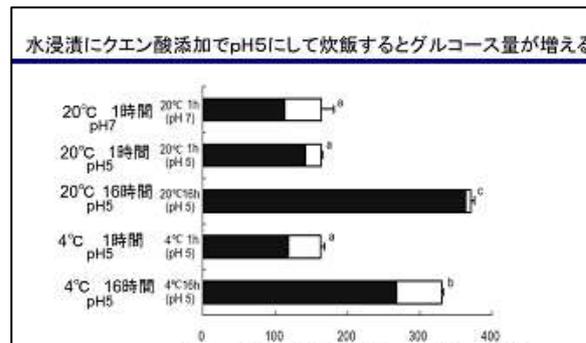
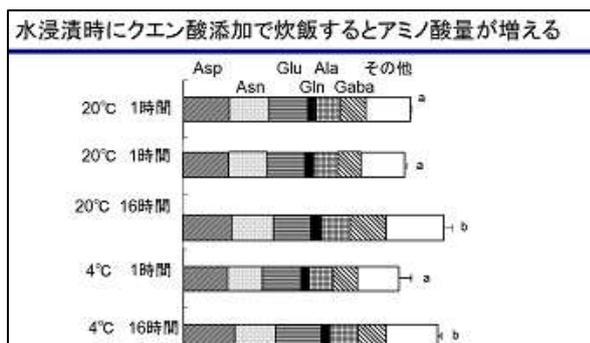
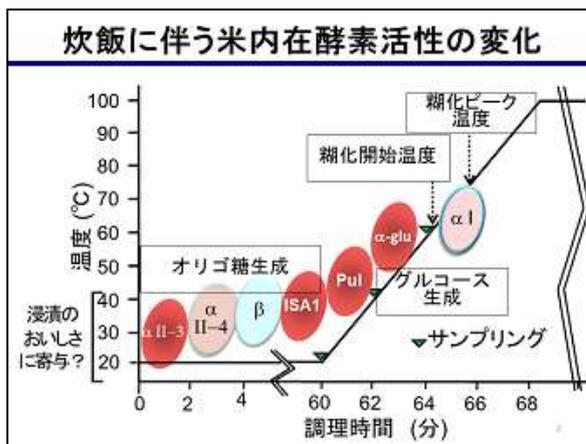
**美味しさ評価技術の開発を目指して**



農研機構育成酒米品種  
(吟のさと)  
定植地から筑波山を望む  
茨城県つくば市栗原台坪



食品科学研究室 大倉哲也 2020.02.13  
大学院FD講演会 十文字学園女子大学 8202



令和元年度 大学院FD

## 健康教育から健康推進研究へー混合研究法への回帰ー

人間福祉学科 吉田 亨

2020/2/13

### 2. 成人の健康教育とは (GLOBALな視点で) (吉田, 1994)

知識(Knowledge)→習慣(practices)→行動(actions)→行動(behavior)→ライフスタイル→QOL

### 3. 日本独自の健康学習 健康学習の創始者たち

宮原伸二(1986) 農村でのprimary care実践から“健康づくり”運動の中心としての学習活動

石川雄一(1987) 市町村での保健事業実践から知識伝達の健康教育から、問題解決の健康学習へ

島内憲夫(1989) ヘルスプロモーションのために生涯健康学習:主体的な健康問題の「発見」と「解決」

松下 拡(1990) 町保健師との共同作業から健康自己管理能力の形成には、主体的な学習が必要

### ☆ 健康教育 と 健康学習 (指導型健康教育) (学習援助型健康教育) (吉田, 1992)

### 5. ヘルスプロモーション (吉田, 1996)

図1 ヘルスプロモーションにおける教育的働きかけと政策的働きかけ

### 6. 群馬大学での研究

【町田大輔】

- 先住国の成人における自家製野菜の栽培-採取-野菜摂取量との関連に関する系統的レビュー。栄養学雑誌 2015; 73: 62-68.
- 野菜-果物栽培活動と健康関連要因との関係都市近郊部在住中高年男性の市販農園利用者に焦点を当てて。日本公衆衛生雑誌 2017; 64: 684-694.
- Vegetable intake frequency is higher among the rural than among the urban or suburban residents, and is partially related to vegetable cultivation, receiving, and purchasing at farmers' markets: A cross-sectional study in a city within Gunma, Japan. Journal of Rural Medicine 2018; 13: 118-123.

※ 2019年度日本栄養改善学会奨励賞受賞、令和元年度日本農村医学会研究奨励賞受賞

【石久保雅志】

- Relationships between daily life behaviors and physical activity measured using a triaxial accelerometer in elderly community-dwelling Japanese individuals. Journal of Rural Medicine 2020; 15: 8-15.

### 7. 今後の研究に向けて

- 母集団を念頭に置く社会調査(量的研究)が、個人情報保護との兼ね合いで、研究としては、機能しづらくなっている。
  - 母集団の名簿がないと、適切な標本抽出ができず、調査ができない。
  - Selection biasが懸念される場合には、標本数をいくら増やしても、母集団の推測は不可能。この問題は、心理社会的側面を扱う研究では特に深刻。
- この問題への対応として、質的研究が、1990年代後半から、再び脚光を浴びている。
  - かつての質的研究(事例研究)には、理論的裏付けがなく、職人芸的であったが、様々な理論が提唱され、一定の評価を得ている。特に、研究対象の選び方については、かなり整理が進んだ。
  - ただし、多くの研究方法が並立しており、決定的なものは存在しない。

### 7. 今後の研究に向けて

- 2010年代に入り、質的研究の限界も意識されるようになり、混合研究法(mixed method)が、注目されている。
  - もともと、研究課題に応じて、量的研究と質的研究を、適切に使分けることが大切だと認識されていたが、両者を組み合わせることで研究を進めるという発想に乏しかった。
  - 研究法の組み合わせ方に関する理論が提唱されたことで、個々の量的研究・質的研究を適切に位置づけられるようになった。
- Positive devianceに関する研究は、量的研究により、positive deviantsを見つけ出し、その後、質的研究を行うという進め方をしている。

Thank you for your attention!

### 3. まとめ

人間生活学研究科食物栄養学専攻の教員は、人間生活学部食物栄養学科・健康栄養学科・幼児教育学科・社会福祉学科 を兼務している。そのため、人間生活学部または全学 FD 活動に参加し、教員としての資質の維持・向上または授業改善を図る目的で、FD 研修会、学生による授業アンケート、公開授業参観等に参画している。

大学院においてもこれに準じ、FD 研修会、大学院生の声を聴くアンケート、人間生活学研究科の FD の在り方に関する検討等の取り組みを実施してきた。FD 研修会では、外部講師による、「メタボロミクス」という新しい概念や手法に関する講演会、ならびに、今年度大学院教員に加わられた2名の教員による、「これまでの研究の経緯とこれからの展望」に関する講演会を開催した。いずれの研修会においても参加教員との間で多くの質疑応答がなされ、研究や教育に関する新しい情報の獲得だけでなく、本学大学院における教育や研究活動の方向性を共有することができた。また、授業アンケートに変わるものとして、メールによる「大学院生の声を聴くアンケート」を実施した。博士後期課程と修士課程の学生から提起された問題に対して真摯に回答し、対応している。さらに、人間生活学研究科での FD の在り方について検討するため、研究科委員会において随時協議を行った。

これらを通じて、大学院の理念や教育目標、教員の心構え等の基本事項を互いに確認することができた。今後も、大学院における授業・研究指導の実態・課題等に関する情報交換・討議を加えながら、さらなる教育力の向上を推進していくことが必要である。